

工学部

| | | | |
|----|-------|-------|---------|
| I | 教育水準 | | 教育 15-2 |
| II | 質の向上度 | | 教育 15-5 |

I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 教育の実施体制

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、当学部は 6 学科 14 学科目より構成され、広い工学分野をカバーしつつ、学理的基礎から境界領域に渡る教育研究が行われている。工学部教育を担当する教員組織は、工学研究科、エネルギー科学研究科、情報学研究科、地球環境学舎、経営管理教育部、学術情報メディアセンターに所属する教員が兼担することによって構成されており、教育遂行のために十分な教員を在籍させるなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、高等教育研究開発推進センターとともに教育改革プログラムを実施している。ディベート形式による工学部ファカルティ・ディベロップメント（FD）シンポジウムの開催、公開授業 FD 関連のシンポジウムの開催、相互研修型 FD の組織化による教育改善を行うなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、工学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、工学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 教育内容

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「教育課程の編成」については、全学共通科目では幅広い選択肢が準備され、専門科目

では十分な実験・演習によって実践力を養うとともに、カリキュラムは入門的内容から応用的内容に至るといった学問体系に従った配置になっている。初年次の学生が学問の最先端に触れる機会を設けて、4年間の学習目標を早い時期に提示するなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、授業アンケートを実施し、結果を公表、教員にフィードバックするだけでなく、教育課程の見直しの資料として役立てている。また、毎年オープンキャンパスを実施し、広く高校生に工学部の目的や求める学生像を伝える活動も行っている。学生への学習支援、就職指導も充実させているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、工学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、工学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

3. 教育方法

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、各学科の教育上の目的を達成するために、講義、演習、実験・実習等バランスのとれた授業形態の構成になっており、新入生に教育効果の高い少人数授業、複数キャンパスでの遠隔授業、情報機器の利用、ティーチング・アシスタント（TA）の活用などが行われ、学習指導上の工夫を行うなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、図書室やコンピュータ環境等自主的学習環境は整備され、学生が十分に利用できるようになっており、CALL教材など主体的な学習を助ける組織的な学習指導も行われている。また、科目履修のモデルコースを提示し、順序を踏んだ教育体系の学修を指導するなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、工学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育方法は、工学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

4. 学業の成果

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、通常の科目に加え、「科学英語」、「物理工学英語」等、国際性を考慮した外国語科目を開講しており、ここでの学修成果が国際的な雑誌への学術論文の発表につながっているものと推察される。また高い大学院進学率から、当該学部の学生が学士課程の学力を身に付けていると推察されるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、卒業年次授業満足度アンケート（図表 11）によると、過去 10 年間で、「満足」は約 75%から約 42%に低下しており、「どちらでもない」は約 25%から約 50%に増加している。しかし、平成 17 年度卒業生の「満足」は約 42%、「どちらでもない」は約 50%であり、学生の満足度をある程度維持・確保するなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、工学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、工学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

5. 進路・就職の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、学部教育が、大学院までを含めた工学高等教育機関として機能し、当該学部の卒業生のうち、88%が大学院に進学、9%が就職し、就職先の70%は技術系企業であるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「関係者からの評価」については、同窓会活動を通して、卒業生からの在学生に対する意見・要望が教員に届けられ、意見交換も頻繁に行われている。また、就職活動において、卒業生が当該学部学生を採用したいと希望している。卒業生アンケートの結果からは、卒業までに8割以上の学生が希望する分野を勉強できたと回答するなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、工学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、工学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が1件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が4件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。